

昨年、先輩達につれられてマレーシアのトレンガヌ州を訪ねた。州都トレンガヌはドリアンの集積地である。ちょうど収穫の時期だったこともあり、町の市場には周辺地域から入荷した果実が山積みされていた。人の頭ほどもあるドリアンの果実は、表面がとげに覆われている。果実の内側は5室に分かれ、各室に1～数個のクリの実大の種子がある。食べるのは種子の周辺のクリーム状の仮種皮である。熟すと強烈な異臭をはなち、観光客がホテルへ持ち込むことが禁止されているほどだ。

マレーシアの先住民であるオランアスリの村を訪ねトレンガヌへ戻るある夕方のこと、途中の道でひとりの女性がドリアンを売っていた。車を運転していたトレンガヌ大学のA教授は車を止め、ドリアンを品定めした上で、「これはいいドリアンだから買ってかえりたい、すこし臭いかもしれないけど車の後ろにつんでいってもいいか」ときくので、「もちろん、問題ないよ」と我々は答えた。その地域はドリアンの産地であり、トレンガヌに比べていいものが安く手にはいるということであった。教授の車は、後ろの荷室と後部座席の間にしきりが無いタイプのもので、後ろの荷室にドリアンを積み込むことになった。ところが10個ほど買うのだらうという私たちの予想に反して、教授はそこで売られていたドリアンの全てを購入した。おおざっぱに見積もって150～200個はあったらう。荷室は天井近くまでドリアンで一杯になり、私たちはそれから4時間の帰路をドリアンの臭いに包まれて過ごすことになったのである。教授は、「トレンガヌに比べると10分の1の値段でこんなにいいドリアンが買えるんだから」と機嫌がいい。

教授は運転しながら携帯電話で親戚に電話をかけ、ドリアンを安く買ったと自慢をしては、その親戚の家に寄ってお裾分けをしながら帰った。親戚の家ではトランクに満載してあるドリアンをみせて自慢し、「すきなだけもっていけ!」とやるわけである。もちろん、自宅にも電話をして、「これからドリアンをたくさん持って帰るから近所の人にも知らせておくように」と念をおした。ドリアンを買った彼の笑いだしたくなるほど嬉しい表情が印象的であった。

私は人類生態学を専攻し、現在、国際保健学の講座に勤務している。国際保健学の分野では、「病気や健康の問題で困っている人々を助けること」を研究の目的とするひとつの流れがある。端的に言えば、途上国への医療援助をいかにして効果的に実施するかを研究する。これは「困っている人は助けなければならない」とする人道主義と、「病気の治療や予防についての現代的な知識を知らない人々にはそれを教えるべきである」とする自文化中心主義に由来する考え方である。一方で、人類生態学が教えるのは、短期的には死亡率を低下させ健康状態を改善させるようにみえる外部からの介入行為が、長期的にみればその集団により深刻な病気とより多くの死亡を生み出す可能性である。例えば、現在多くの地域にみられる人口爆発とそれにとまなう食糧不足は、歴史的にみれば、その地域において出生力に配慮することなく実施された保健医療的介入の結果であるとみなすこともできる。また、現在のバングラデシュが直面する砒素汚染は、かつて国際機関の主導で行われた井戸水利用による下痢症抑制プログラムの帰結であるといえなくもない。そのプログラムに携わった人は良心に基づいて仕事に取り組んだはずで、それが後になって別の問題をうみ出すとは思ひもしなかったであろう。「個人の健康」と「集団の健康」は評価されるべき時間軸が異なっており、前者がどんなに長くてもその個人の一生を超えて評価されることがないのに対して、後者は時として世代を越えた評価を要求する。ここに国際保健学の本質的な難しさがある。

ドリアンを買った教授の「笑いだしたくなるような嬉しさ」に接したとき、国際保健学における難しい問題は論理的につきつめていくよりも人間としての感じ方のレベルでとらえた方が適切なのかもしれないと直感的に思った。私たち人間にとって日常の生活のなかで「笑いだしたくなるような嬉しさ」を感じることは大事なことであり、そのために外部からの国際保健学的な介入を必要としている社会もあ

れば、そうでない社会もあるだろう。また前提として、ある社会のなかにはいっていく外部の人間はこの人々が「笑いだしたくなるような嬉しさ」を感じるようなエンターテイナーである必要があろう。少なくとも、ドリアンを嬉しいと感じる人々に間違えてマスクメロンを贈るべきではないし、「ドリアンは臭いからいやだ」という価値観を人々に押しつけるべきではない。国際保健学は、このあたりのバランス感覚を研究し教育する分野になればいいのではないかと思うのだが、どうだろうか。